



視聴覚館内部（第一視聴覚室）

まざまの面に充実をみ、成果があげられてきたが、三十八年十一月、千葉県私学生生活指導部会が開催された。委員長は、大場弘道先生（元聖書学園高等学校長）、実行委員長は本学院院长伊藤一郎先生であった。この大会における本学院の果たした役割は非常に大きく、千葉県私学教育への寄与と共に、本学院における生活指導部門の一層の充実への一契機となった。

## 二、千葉県高等学校視聴覚教育研究発表会開催

視聴覚教育は、昭和四十年年度から毎年二学期に研究会が開かれ、公開授業及び講演会などの研修が重ねられてきた。昭和四十一年度には、NHKから高等学校が放送教育研究の委嘱を受けていたので、高等学校の放送教育の研究を進め、昭和四十二年度には、視聴覚教育は一段と充実した。

夏休みには、十五周年記念教室と呼称されていた建物の二階の和室を視聴覚教室に改造し、全館が視聴覚施設となった。この年から、視聴覚ライブラリー主任に小野若命教諭が委嘱された。

視聴覚ライブラリーでは、ラジオ放送の録音、テレビ放送の録画が毎日行われた。これらの教材は、各教科及びホームルームで多く利用され、



研究会全体会の様子

ホームルームでは「青年期の探求」のラジオ番組が広く利用された。教科では、英語の「Listen to me!」、国語の「国語の研究」、「古典の研究」、音楽の「名曲ライブラリー」、社会の「時の話題」のラジオ番組が多く利用された。

テレビ放送は、ビデオテープレコーダー、モニターテレビ、録音テープが非常に高価なため、当時は数も少なく、社会科、理科、家庭科だけに制限しながら利用された。これらの教材は、当時は千葉県下での公立学校では一台も設備されていないという大変貴重なものであった。

昭和四十二年九月、本校を会場として、千葉県下の公私立高等学校の参加する視聴覚教育及び放送教育の研究会が開かれた。これは、千葉県高校教育研究会視聴覚部会の視聴覚研究の発表及び二年間委嘱を受けた放送教育研究者の発表を公開したものである。参加者は、県内の高等学校から約八〇名、近くの小・中学校から数名、それに本学院の小、中、高校全職員、奨学会、母姉会の役員、公開授業及び各係の高校生等であった。

この研究会を契機として、外部での研究発表をも積極的に行った。昭和四十二年十月、千葉市の文化会館及び九十九里町の九十九里センターを会場として、千葉県ではじめての高校視聴覚教育の全国大会が開かれたが、これには本学院から久松英壽教諭が、高校部門の実行委員に委嘱された。さらに、社会科部門で「社

会科における能力差に応じた指導法」と題し、研究発表を行った。又、本学院の家庭科の授業を木村紀子教諭が、また、書道の授業を安部登喜子教諭が、それぞれVTRによって公開し、好評を博した。

### 三、千葉県私学中高図書館教育研究会開催

生徒の自主的な学習を指導し、奨励するためには、自主的な学習の場が用意されなければならない。その意味において、図書館教育の重要さがある。本学院は、教育諸施設がまだ不十分な状態にあった時から、図書館の整備拡充につとめて来た。逐次図書室の充実計画と蔵書の増大を図り、高等学校本館の建設にともない、施設に余裕が出来たので、三十八年度に最も図書館の整備拡充が図られた。そして閲覧室、研究室がつけられ、書庫が拡充されたが、四十一年末火災に見舞われたため、更に新たな図書施設を拡充して、図書館教育を進展させる計画がなされ、四十二年度新たな図書館が建設された。

図書館が設置された時に、学院長は、学校図書館の目ざすものとして三つの目標を挙げられた。

- (1) 図書館を教科学習と密着させて、生徒に自主学習の資料を提供すること。
- (2) 生徒の読書の場として、その読書習慣を育てるようにつとめること。
- (3) 教職員の研修と指導資料センターとしての役割を果たすこと。

このように学習指導の一貫としての図書館は、学習に必要な参考書、文献、基本図書、辞典を整備していることであった。一方、読書教育の場としての図書館は、読み物を収集し、生徒に読書欲をつけさせ、教養

を高めることにあった。

本学院が新しい図書館をつくり図書館教育を熱心に行っていることから、本学院において図書館教育について、私学の研究会を開催してほしいとの強い要望があり、昭和四十三年十一月十五日午前十時より千葉県私学中学高校図書館教育研究会がもたれた。従来「読書教育について」の研究会はしばしば行われていたので、今回は「図書館教育と教科指導をどのように結びつけたらよいか」という新しいテーマであった。

## 第十節 秋空に広がるグラウンド

### 一、総合グラウンド完成

本学院では、スポーツ教育を発展させるために、新たに総合グラウンドを造成する計画が、昭和四十年から進められてきた。十一月末真間川を越えた本学院隣接地、約二、〇〇〇坪の農地買収が正式に決まり、昭和四十一年三月水田の埋立が始まった。以後二ヵ月で土盛りが完了し、学校から敷地のグラウンドへ通ずるところの真間川に小橋がかかけられ、「弁天橋」と命名された。工事は、途中台風四号による真間川水害で夏休み前の完成予定が延々となり、四十一年九月末に完成した。この工事と並行して、グラウンド設計の話合いが、体育科代表職員及びグラウンドに関係する職員の間ですすめられた。

グラウンド設計の概要は、「周囲は一面金網のフェンスが設けられる。内には、陸上競技用トラック、砂場、バレーコート三面、テニスコート二面、その他、トラック内を利用して、ハンドボール、ソフトボールなども行う。付属施設としては、更衣室、運動用具倉庫、便所等を含む建物一棟、水呑場、足洗施設、放送施設などを備える」といった立派なものであった。

青空に広がるグラウンドで、十月初め、小学校の運動会を皮切りに、続いて中学、高校の順に体育祭が行われた。広々とした場所でのびのびと競技し、楽しい雰囲気満ちていた。

## 二、開場式挙行

昭和三十九年十月の東京オリンピック大会の開会式を再現したような盛大な開場式が、昭和四十一年十月二十三日（日）午前十時より、快晴に恵まれた総合グラウンドで挙行された。メインポールには日の丸の旗が、左右のポールには、校旗、生徒会旗、ポールの後面の金網には、各国の旗を思わせる本学院の体育クラブ旗が、秋風に静かにたなびいていた。

グラウンド開場後は、それぞれのクラブで使用し、また毎年体育祭は小、中、高共この会場を使用しているが、なお狭隘を感じ、拡張が要望され、昭和四十八年に更に拡充された。その結果、二〇〇メートルのトラックが完成



完成した総合グラウンド

し、トラックに沿った一〇〇メートルの直線も出来、陸上競技に大変優れた施設を持つこととなった。

## 第十一節 新しい教育施設の整備

### 一、拡充された新教育施設の建設

昭和四十二年、年が改まるとともに、昭和四十一年暮に火災発生により失われた教育施設の復興にとりかかった。このようなスピード化された復興は、「教育進展の大切な時期に、教育施設等を失うことは教育の後退である」と学院長が考えられたからであった。

四十二年の新春を迎えた二日から、学院長と山木設計事務所との間に、体育館、家庭科館・図書館などの新築工事の基本計画についてたびたび打ち合わせが行われ、二月上旬に設計が出来上り、業者の選定、見積りと順調にすすんだ。三月三日に多田建設株式会社との間に建築契約がとりかわされ、三月十四日に地鎮祭を終え、八月末の完成をめざし着工の運びとなった。この年は梅雨期が比較的短く天候に恵まれたこともあって工事は順調に進捗し、九月五日に工事の引渡しが行われ、四十二年度二学期から使用された。

完成した施設は、体育館、家庭科館・図書館、L.L教室等である。それに家庭科館の屋上には、学校教育施設としては類のない、プラネタリウムが新設された。建築面積は三、三〇〇平方メートルで、内訳は体育

館が一、九〇〇平方メートル、家庭科館・図書館が一、三〇〇平方メートル、ほかに一〇〇平方メートルという立派なものである。総工費は一億一、五〇〇万円、ほかに内部設備一、五〇〇万円という近代的な教育諸施設が誕生した。

## 体育館

体育館は、焼失した従前の三倍の広さであって、その特色は、(一)純然たる独立の体育館であって、講堂と兼用でないため、講堂式のステージはなく、二階四方に観覧席として、ギャラリーが設けられ、約三〇〇名を収容できる。(二)高さは、最高一メートル最低八メートルで、公式屋内コート基準を上まわっており、また室内照明度は、水銀灯を備え、二五〇ルクスと夜間競技設備を整備した。(三)床は、弾力性の点から、楡材を用い、塗料は光沢があり、すべらない、しかも耐水性のあるマーブラックを使用した。(四)付属施設として、玄関ポーチ、受付室、選手控室、体育科室、保健室、更衣室、シャワールーム、便所、倉庫二棟があり、保健室には体力測定器具を備え、更衣室は一二〇名分のロッカーを置き、シャワールームは温冷水併用の施設となっている。(五)コートはバスケット、バレーボール三面(中央コートを含む)、庭球一面、バドミントン六面、中央に防球ネットを備える。その他、体育施設として、肋木、移動式低鉄棒があり、バスケットでは、高校では稀なプラスチック一三ミリのバックボードを備えた。

## 家庭科館

家庭科館は、一階に食物室二つ、二階に被服室二つと、一階中央に食物準備室、二階中央に被服準備室が設けられ、教室は各々一二五平方メートルの広さをもっている。その特色は、(一)食物室は、上級、下級学年に適應して設備を異にした。一室は、試食台を別テーブルとし、他室は、調理台を試食台と兼ねさせ、また大量ガス炊飯器を備えて調理指導の改善をはかった。準備室にユニットキッチンを設ける。(二)被服室は、

二室とも同一設計で、ミシンは全部シンガー、各室一五台、製図機各室一台を備える。準備室の中に仮縫コーナーを設けて、両被服室と接続させた。

### 図書館

図書館は、道路の騒音を防ぐために、三、四階とした。三階には、中央に図書館事務室があり、左右に、閲覧室、二五〇平方メートルが設けられた。



旧図書館閲覧室



新築された家庭科館食物室



収容人員は、全部で一六〇名である。閲覧室には、閲覧机、椅子の他に、新聞雑誌コーナー、辞書コーナーがあり、携帯品格納のためのロッカーが備えられている。書架は開架式で、壁面、窓下にぎっしり並べられた。四階は、教員研究室兼集会室、談話室、書庫、作業室と小区分された。教員研究室は、教職員の研究資料を一まとめにして、その便をはかるものであった。また、ここは図書館の諸集会の用に供した。談話室は、休憩と資料展示に使われ、四十五年度まで、中高生徒に図書館を親しませる役割をになった。しかし、この四階の施設は、四十六年度において語学教育の充実のために、LL教室に改善された。

新築された図書館は、通風、日当たりが良く、読書の場として十分に役立つ施設である。さらに昭和五十五年十一月から創立四十周年記念図書館として新しい図書館を建築した。

### LL教室

LL教室は、図書館と同じく四階に設けられた。焼失した従前のLL施設の反省の上に、新しい構想をもとにして設置された。それは六〇台のブースからなり、全部、簡易ラボとして利用できる。そのうち二〇台に、テープレコーダーが備えられ、能力差にに応じて指導できるように工夫されている。LL装置は、コロンビア社の製品を入れた。また、この



新設されたLL教室

教室と、図書館の教員研究室との間に、英語科研究室があり、その中に録音室が設けられた。

## プラネタリウム

屋上に銀色に輝くステンレスのドームは、新館の一つの偉観をなしている。これが、理科、とくに地学の学習施設としてのプラネタリウムで

ある。球の直径五メートル、約五〇名収容できる。映写により天体の状況、変化などを学習するもので、一般に数少ない施設であった。

## 二、新築校舎の落成式挙行

昭和四十二年十月十日、国民の休日として体育の日が制定されて二年目の記念すべき体育の日に、新築された校舎の落成式が、新体育館で挙行された。この日は晴天にも恵まれ、三六〇名にも及ぶ多数の来賓、父兄が臨席され、盛会であった。



落成式で式辞を述べる学院長



家庭科館屋上に新設されたプラネタリウム

## 第十二節 創立三十周年記念

### 一、中高校舎の建設

創立三十周年記念事業の一つとして計画された中高普通教室の木造校舎解消、四階建て鉄筋校舎の新築工事は、昭和四十四年三月に着工し、着々と進められた。その第一期工事は、三号館として中学館の西側に延長されたものであるが、普通教室二六室に下足室を含めて、一、九一二平方メートル（八八一坪）で予定通り、昭和四十四年八月を以て完工した。続いて、四号館として第二期工事が九月着工し、普通教室九室のほかに社会科教室、商業科教室の特別教室二室を含め、その他付属施設として、塵芥焼却場、下足室など一、三九〇平方メートル（四六一坪）で、これも四十五年三月末をもって完工した。特に特別教室は各室とも普通教室の二倍の広さで、社会科教室には、在来の視聴覚教室に比して劣らない視聴覚施設設備が整備され、十六ミリ・八ミリの最新の映写機、幻燈機、ビデオレコーダー、テープレコーダー、オーバーヘッドプロジェクト等社会科授業に使用される視聴覚教具教材、それに電動映写スクリーンが設けられていて、他には見られない整備されたものとなった。また商業科教室には、アナライザー（集団学習効果測定装置）というティーチングマシンが装備され、学習効果の測定が出来るようになった。またテープレコーダー三台を備え

計算実務の能力的指導に利用されることとなった。

## 二、創立三十周年記念式典挙行

創立三十周年記念式典は、昭和四十五年十月二十九日、三十日の両日にわたって盛大に挙行された。

二十九日は学内を対象として、幼稚園・小学校は幼小新講堂で、中学・高校・短大・栄養学校は大講堂で、二回に分けて行われた。